月経はどのように捉えられ経験されるのか
――月経対処が開発アジェンダになる中で、ウガンダの事例から考える――

国際地域学部国際地域学科准教授
杉田　映理

【要旨】執筆言語要旨

近年、女性の月経への対処が国際的に注目されるようになってきた。「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」においても月経対処の必要性が示唆されており、月経衛生への対処をMHM（Menstrual Hygiene Management）と呼ぶ略称も開発業界では定着をしはじめている。しかし月経は隠されたことの多い領域で、文化によって多様な諸相があるだけに、開発支援が大規模に入る際に、配慮すべきことがあるのではないかと考えられる。

本稿では、ウガンダの農村部の女子中学生が月経をどのように捉え、経験しているか、公立中学校に通う女子生徒を主な対象者として聞き取り調査した結果を一事例として報告している。そこから、月経をめぐる多くのタブーが存在する一方、48％の女子生徒たちが初潮まで月経について知らないなど、十分知識を得る機会がない実態が浮かびあがってくる。また月経用品の取り扱いについても、いろいろな懸念を抱いていることが理解できた。こうした調査結果をもとに問題提起と提言に結び付けたいと考える。

【キーワード】 月経、文化、タブー、Menstrual Hygiene Management（MHM）、ウガンダ

【目次】

1. はじめに
2. 研究の背景
3. 本研究の目的
4. 調査対象地と対象校
5. 調査手法
6.「マサバ山へ行く」：隠語の世界

7. 月経にまつわるタブー
8. 知識の伝達
9. 月経用品とその処理
10. 考察・問題提起

1. はじめに

この数年で、女子の月経（生理）問題が国際的に注目されるようになってきた。とくに2016年がキックオフの年となった「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs)」について、目標や指標をどうするかが国際的に議論される中で、女性の月経への対処の重要性が共通認識となっていった。すなわち、ジェンダー平等の実現、女子教育の推進、女性のリプロダクティブ・ヘルスの改善、安全な水と衛生へのアクセス向上など、いくつかの側面から月経の問題が課題と理解されるようになったのである。筆者も、もともと月経やジェンダーについて研究をしていたわけではなく、開発における給水やトイレ、衛生行動の調査を実施していたが、そのかかわりの中で月経への対処が開発アジェンダとしてより大きくなってきていることを認識していった。

一方で、月経は多くの社会で隠された領域だと言える。月経にまつわるタブーも多く、文化によって多様な諸相が存在するだけに、国際的な開発支援が大規模に入る際に理解すべきこと、検討すべきことがあるのではないか。本研究では、将来的には開発の介入対象地域となるような、つまりは現在のところそうした開発の波の押し寄せていない地域であるウガンダ農村部を事例として取り上げ、対象地の女性の現状について詳述する。、さらにその調査結果をもとに今後への問題提起と提言に結び付けたいと考える。

2. 研究の背景

2-1. 月経：隠された領域

月経とは、女性の妊娠期と産褥期を除く性成熟期を通じて、一定の周期をもって規則正しく発来する、子宮内膜からの生理的出血のことを指す（大辞林、2016)。女性の生殖機能として月経は重要な役割を担っており、女性の健康とも深く結びついている。そのため、月経に関する研究は、産婦人科の領域での医学的研究が多数ある。確かに月経は、女性の身体が経験する普遍的な生理現象であると言える。

その一方で、月経にまつわる慣習や禁忌、隠語などは、それぞれの社会特有のものが多く存在し、月経の捉えられ方、対処のされ方は、非常にローカル化されている。つまり、女性たちは、月経に与えられる文化的・社会的なローカルな価値観に沿う形でそれを経験するのである。

月経をケガレと結び付けて捉える社会は多く、日常生活において月経中の女性の行動が制

限されるケースも世界各地で多くみられる。また、多くの社会の中では、月経について話したり、月経中であることを知られたりするのはタブー視されることが多く、女性特有の生理現象であることから男性からは隠された領域とされていることも少なくない。そもそも、*taboo*（タブー）という言葉の由来は、ポリネシアの*tapu*という「月経」を意味する言葉であったと言われている（武谷、2012）。これは月経とタブーが密接に繋がっていることの表れかもしれない。

これまで文化人類学者は、月経をめぐるローカルな文脈について研究を重ねてきた。日本においても月経が出産とともにケガレとされ、月経中の女性を月経小屋に隔離して生業活動からも遠ざける習俗が、地方によっては比較的近年まで存在したことが報告されている（波平2009）。現在も、たとえばインドの農村部で月経中の女性がヒンドゥー教の寺院へ参拝に行くことや儀礼にかかわることが厳しく禁じられている（松尾2007）など、多くの社会で月経中の女性や経血をめぐるタブーは色濃く残っている。しかし、新本（2013）がパプアニューギニアにおいて観察したように、2000年代初め、月経小屋が使われなくなった時期と、月経対処用の紙ナプキンが普及し始めた時期が重なっており、物質文化の変化が社会に変化をもたらしている様子もうかがえる。その社会では、これまでコミュニティ内で月経中である女性が誰か、月経小屋の利用によって公然の事実であったものが、紙ナプキンの利用によって隠された領域になりつつあるという。

2-2. 開発課題となった月経対処

この数年で、女子生徒の月経対処の問題が国際的に注目されるようになってきた。一般には公の場で語られることは少なかった月経について、Break the Silence を標語に、国際会議の場で、NGOの執務室で、そして政府の議事として、男性も共に議論されるようになったのである。この流れをつくる一つの大きなきっかけとなったのは、2000年の国連ミレニアムサミット以降、国際的に共通の目標とされてきた国連ミレニアム開発目標（MDGs）が2015年に目標の期限年限を迎えるにあたり、国際社会がポストMDGの次なる目標を検討し始めたことである。ポストMDGs、すなわちSDGsの目標や指標についての検討過程において、衛生改善の際に女性の月経に配慮することを含めるべきだとの議論になった（WHO & UNICEF 2014）。月経衛生への対処をMHM（Menstrual Hygiene Management）と呼ぶ略称も開発業界では定着したのもこの時期である。

月経が議論の俎上に乗った最大の理由は、月経が阻害要因となって、女子生徒が学校を休んで出席率が低下し、ひいては落第や退学へとつながっていると考えられるからである。思春期の（つまりは初潮を迎えた）女子生徒の学校出席率がトイレの改善によって向上するという。例えば、タンザニアのある地域では学校のトイレの改善によって女子の出席率が12%も向上したというデータもある（UNDP 2012）。WaterAidという大手の国際NGOのHPでは、

こう語られている：

「学校にトイレや手洗い場がない場合、月経中は学校に行けなかったり、学校を辞めたりしてしまいます。これは女の子たちから、教育を受ける権利や貧困から抜け出すための最初の大切な一歩を奪い取っているということである。」（ウォーターエイドジャパン 2015）

つまり、女子の就学率の向上、ジェンダー平等化の観点からMHMが開発実施機関から重要視されているのである。また、女性のリプロダクティブ・ヘルスの健康保持の観点からも、MHMが注目されている。

最終的にSDGsの衛生についてのターゲットは以下のように決まった。

By 2030, achieve access to adequate and equitable sanitation and hygiene for all and end open defecation, paying special attention to the needs of women and girls and those in vulnerable situations（United Nations 2016）

「月経対処」という文言はこの中に含まれなかったものの、「特に女性と女の子のニーズに配慮し」という表現を以って月経への対処が示唆され、実質的には国際的な課題として認識されることになったのである。

議論やスローガンだけでなく女性の月経をめぐる状況を改善することを目指して、MHMの実践的な活動を国際NGO、ローカルNGOやUNICEFはすでに開始されている。主な事業の一つとして、再利用できる布ナプキンの開発・普及、あるいは使い捨ての紙ナプキンの配布がある。たとえば、ウガンダにベースをおくNGOによって生産・普及されようとしている布ナプキンとしてAfriPadが挙げられる（AfriPad, 2016）。

生理用品を適切に交換できるトイレがないことも女子生徒が月経中に学校を休む原因だということで、学校トイレの設置・改善を実施している開発支援組織もある。まず、月経用品を衛生的に、そしてプライバシーを確保されて取り換えられるトイレの設置である。さらに、経血がついてしまった手などを洗える給水施設を整備する取り組みがある。また、使用済みの紙ナプキンを廃棄できる設備（サニタリーボックスの類、焼却炉、廃棄用の穴）の設置支援をする場合もある（BRAC 2015）。

月経に関する啓発活動や知識の普及に取り組むNGOもある。たとえば、5月28日を「月経衛生の日」に定め、MHM の啓発活動を推進する動きがある（Wash United, 2015）。これは、月経がおよそ28日周期でおこり、人によって長短はあるものの一回の周期中約5日間続くことに引っ掛けて5月28日としたものであるが、主目的は「月経衛生の日」を設けることで、月経衛生の重要性について意識と議論を高めることにある。

本稿の対象地であるウガンダにおける動向についてもここで触れたい。ウガンダでは、教育省がNGOの働きかけに呼応する形で、月経教育の推進や学校のトイレを月経に対処しやすいものにすることを政策化している。政府もMHM推進に賛同して、2014年以来で表1に

記載したとおりかなり踏み込んだ政策を掲げるようになった（Ministry of Education and Sports, Government of Uganda, 2013, 2015）。2014年8月にMHMに関する国際会議が開催され、教育大臣が女子生徒の月経の問題対処の重要性を訴えた。この会議は、上記の5月28日をMenstrual Hygiene Dayと定めようという国際NGOの動きに呼応したものである。2015年1月に採択された月経衛生憲章（Menstrual Hygiene Charter）では、月経対処が学校でもできるように学校のトイレと手洗い施設を整備し、緊急時の制服の着替え場所と下着やナプキンの提供をするとともに、サポート教員を配置すべきだとしている。こうした政策に対する予算の裏付けがないという批判もあり、国全体の学校レベルにまで対策が及ぶのは時間がかかると思われるものの、国の政策としては先進的な事例であるとされている（Snel, 2015）。

表1. ウガンダ政府におけるMHMへの取り組み

2014年8月	ウガンダ政府協力のもとMHMに係る国際会議の開催
2014年11月	国会で提議
2015年1月	月経衛生憲章（Menstrual Hygiene Charter）の採択

3. 研究の目的

上記のとおり、近年「月経」への対処が開発アジェンダとして急浮上している。しかし、月経は隠されたことの多い領域であり、文化によって多様な諸相が存在することも上で述べたとおりである。女性、とくに思春期の多くの女子が困難を抱えながらも声に出せない月経の問題が着目され、それに対処しようという動きがでていることを筆者は歓迎したい。しかし、月経は隠されたことの多い領域であり、文化によって多様な諸相が存在するだけに、国際的な開発支援が大規模に入る際に、理解すべきこと、検討すべきことはないのであろうか。とかく普遍的なアプローチが取られやすい国際的な開発支援が大規模に入る際に、理解すべきこと、検討すべきことはないのであろうか、という筆者の疑問が、本研究の出発点である。

本研究では、将来的には開発の介入対象地域となるような、つまりは現在のところそうした開発の波の押し寄せていない地域であるウガンダ農村部を事例として取り上げ、対象地の女性の現状について調査した。開発の波の押し寄せていない地域を対象としたのは、NGOなどによるMHM支援の入った地域の女子学生の声はNGOなどのレポートやホームページで多く見られるからである。さらに、開発介入の入った地域において支援者自身が拾った裨益者の声にはバイヤスがかかることもあり得るという可能性を考え、まだMHM支援プロジェクトなどの入っていない地域を本研究では対象とした。

本稿では、まずウガンダの女子生徒たちが月経についてどのように学び、どのように捉え、何をタブー視し、経験しているかを、ウガンダ東部のマナファ県の農村部にある公立中学校（Secondary School O-level）を対象にした調査の結果を一事例として報告するこる。さらに、

その調査結果をもとに、今後の国際的なMHM支援を実施をする際の問題提起と提言に結び付けたい。

4. 調査対象地

本稿の調査対象地は、ウガンダ東部のケニアとの国境に近いマナファ県ブゴベロ副郡（サブ・カウンティ―）である。調査地は、アフリカで4番目に高い標高4300メートル以上のエルゴン山の裾野に位置する、標高1450m~1600mほどの比較的なだらか丘陵地帯であり、農業を生業とする村落部である。水道はなく、ポンプ式深井戸をコミュニティで共有しており、電気は2012年に一部開通しているのみという状況だ。

民族的には、バンツー系のギス（別名マサバ）という民族が人口の9割以上が占めている。この民族の別名マサバは、エルゴン山の現地語、マサバ山から来る。マサバ山は聖なる山とされ、民族の始祖が生まれた場所とされている（New Uganda, 2014）。

筆者が調査を実施した学校は、ブゴベロ・ハイスクール（Bugobero High School）というブゴベロ副郡で唯一の公立中学・高等学校である。ウガンダは、小学校（primary school）7年間、中学校（high school-Ordinary level）4年間、高校（high school-Advanced level）2年間となる。ブゴベロ・ハイスクールはOrdinary levelとAdvanced levelの両方があり、全校生徒数は6学年で1700人ほどいる。この学校には雨水タンクがあるだが、雨季のあとしばらくすると枯れてしまい、学校裏にあるコミュニティの井戸も利用している。

ウガンダは、上記のとおり2014年以来政策は整ってきているが、一部のNGOの支援対象となっている地域を除いて、学校レベルに支援が来ている状況には至っていない。私が調査を実施した学校でも、実際の介入はまだ何もないという状況であった。

5. 調査手法

本調査では、表2のとおりいくつかの手法を用いてデータ収集を実施した。1）公立中学校の3、4年生女子を対象にした質問票調査、2）上記対象者の一部を対象に行ったフォーカス・グループ・ディスカッション（3グループ）、3）女性教員へのインタビュー、4）子持ちの地域住民の女性へのインタビュー、5）この地域唯一（定期市以外で）生理用ナプキンを販売する雑貨屋へのインタビュー、である。データは主に女子中学生から得たが、世代による慣習の違いや伝統的な考え方を理解するために、地域住民からも情報を得た。

表2. 調査手法

データ収集手法	対象者	人数r
1）質問票調査	中学3年生、4年生	90人
2）フォーカス・グループ・ディスカッション	中学3年生、4年生（上記の 90 人から選定）	3 グループ = 23人
3）インタビュー	中学の女性教員（Senior-woman Teacher）	1人
4）半構造化インタビュー	子持ちの地域住民の女性	41人
5）インタビュー	生理用ナプキンを販売する雑貨屋へのインタビュー	1人

6.「マサバ山へ行く」：隠語の世界

まず、月経中であることの表現として、ギス語では一般的に「マサバ山へ行く」（*khutsa iMasaba*）というフレーズが使われる。マサバ山はギス民族にとっては聖なる山とされる。なぜそのように表現されるのか聞くと、女子生徒たちは「そう昔から言われているから」という以上の説明ができなかった。住民女性たちも、理由は知らないという人が多い中で、「マサバ山に登るほど、月経は大変なことだから」「月の出る夜は、マサバ山が赤く染まるまら」などの由来を語る人もいた。始祖が誕生した聖なる山へ行くという表現から、神聖なものに対する畏れや生殖と結び付けられた表現だと解釈することもできよう。

一方、月経について「（暦の）月の病になる」（*khuluwara mumwesi*）という表現もあり、これはことばのとおり1か月ごとに来る病という意味である。月経という生理現象について、病といういわばマイナスの表現がある一方、聖なる山へ行くという相異なる表現が併存する点は興味深い。一方、女子生徒のみの間で通じる隠語がいくつかあり、男子生徒の前や村人の前では女子生徒たちはそれを用いているという。たとえば国会議員Member of Parliament の略称MP と Menstrual Period をひっかけて、月経をMPと呼んだり、さらに国会議員に掛けて「今、選挙活動中なんだ」などと表現したりする。また、月経用の紙ナプキンを「パン」と呼び、紙ナプキンをキオスク（雑貨店）に買いにいくことを「パンを買いに行く」と言うこともあるという。なお、そのキオスクは、学校に近い店で唯一紙ナプキンを販売しているところであり、現にパンも売っている。

このような隠語が存在するということ自体、月経中であることを知られたくないという社会の女子学生たちがくらしていることを表している。後に示すように、月経であることを知られなくないのは、単に恥ずかしいということだけではなく、呪術に対する恐れが関係していると考えられる。

7. 月経にまつわるタブー

ギスの文化として月経小屋や月経中の女性の隔離はないものの、月経中の女性にとってタブーとされる行為は多岐にわたる。女子中学生に対するフォーカス・グループ・ディスカッションでは、非常に多くの行為が挙げられ、中には、ある生徒が挙げた事例について「それは本当は大丈夫だと聞いたよ」あるいは「え、それっていけないの」などという行為もあった。つまり、タブーだと信じられているものにある程度の差異があるようである。

表3に、タブーとしてあげられた主なものを列挙した。ここには、全員が一致してタブー視しているもののみならず、数人が共通して認識していたものも含んでいる。リスト化してみると、タブーとされる行為がある程度カテゴリーに分けられると考えられる。

例えば農作業に関するタブーとして、月経中の女性が、落花生、さつまいも、南瓜の畑に立ち入ったり、農作業（種植え、草取り、収穫）をしたりすることが挙げられる。そのタブーを侵すと、作物が枯れたり不作になったりするという。またマンゴー、アボガド、ジャックフルーツの果樹に登ると、その実が腐るか不作になるという。いずれも、生業・生産に関わる禁忌であると言える。なお、これらの作物は、ウガンダ東部の農村部において主要作物ではないものの一般的によく見られるものである。

また、飲食に関するタブーとして、牛乳、紅茶、ソーダ（コーラなどの炭酸清涼飲料水）など水以外の水分を取ると、月経の血量が増えると信じられており、こうした飲み物を月経中は控えているという。この地域の女子学生にとっては、滅多に飲めないソーダを振る舞われた場合は、「後でゆっくり飲みたいから」と家に持ち帰って月経が終わるまで取っておくという生徒もいた。サトウキビを食べることもタブーとされるが、サトウキビも水分の多いからであろう。彼女らなりの生理的な解釈があるようだ。

また、この地域はクリスチャンが多いのだが、教会に関連するタブーも存在する。月経中に教会へ行く、教会の聖歌隊に参加する、聖書に触れるなどするとイエスを穢すことになるため、禁忌と考えている生徒が少なからずいた。教会の牧師に、月経中の女性は教会に来るべきではないと教えられたという生徒もいた。また、月経中に聖書に触れることに対しては禁忌でははないと主張する生徒もおり、彼女たちの間で議論が交わされていた。

月経の経血が付着したものに対しては、かなり強い禁忌が見られた。下着や経血の吸収剤として利用した古布を洗濯後に外に干すことは決してできないとのことである。また、使用済みのナプキンなどを人（や犬）の届くところに捨てることも、「絶対に良くない」と全員が口々に言っていた。いずれ場合も、経血が付着した（していた）ものを自分に悪意を持つ人に持って行かれて、邪術を掛けられると考えられている。そして最悪の場合は不妊となると恐れられている。地域住民の女性へのインタビューでも、次のように語っていてる若い女性がいた。ある日、干していた下着が無くなってとても心配したが、その後妊娠をしたから、あの下着は呪術を掛けるのに使われたのではなかったようで良かった、と言うのである。経

血のついた下着および経血を吸収させる古布の洗濯・乾燥の方法や、ナプキンの処理法には細心の注意が払われる所以である。

表3. 月経にまつわるタブー

タブーとされる行動	理由
［農作業に関連するタブー］	
落花生の種を植える、草取り、収穫をする	落花生が枯れる・不作となる
落花生の畑を横切る	落花生が枯れる
サツマイモを植える、草取り、収穫をする	サツマイモ が枯れる・不作となる
カボチャの種を植える （なお、収穫はタブーではない）	カボチャが枯れる
カボチャの畑を横切る	カボチャが枯れる
マンゴー、アボガド、ジャックフルーツの果樹に登る	果樹が枯れるか実が腐る
［飲食に関するタブー］	
サトウキビを食べること	経血が増える
ソーダを飲むこと	経血が増える
紅茶を飲むこと（ミルク入りではない）	経血が増える.
牛乳を飲むこと	経血が増える
揚げた豆を食べること	
［教会に関連するタブー］	
教会へ行く	ケガレているから
教会の聖歌隊に参加する	月経中で腰痛がひどく、教会の前方で踊ることができない
聖餐式に参加する	
聖書に触れる	経血がイエスの血と混じって不純になる
［月経用品に関するもの］	
経血吸収体として利用する古布を洗ったあと屋外（人目につくところ）に干すこと	古布を持っていかれて邪術に利用される（不妊になる）
下着（パンツ）を洗ったあと屋外（人目につくところ）に干すこと	下着を持っていかれて邪術に利用される（不妊になる）
ピットラトリン（落とし込み式トイレ）の穴以外にナプキンや経血の吸収体を捨てること	持っていかれて邪術に利用される
［その他、日常的な行為でタブーとされるモノ］	
薪割りなどの重労働	経血が増える
料理をする	ケガレているから
川での水浴び	経血が増える
夫と寝ること（例外もある）	夫にとって得はないから
自転車に乗ること	ネズミが自転車のサドル部分を食べる

［出典：筆者作成］

8. 知識の伝達

では月経についての知識を、女の子たちはいつ誰から教えられるのであろうか。驚いたことに、初潮が来る前に月経について教わったのは女子中学生90人（平均17歳）中47％、つまりは半数以上が、月経が来て初めて月経について知ったということである。

今回の調査対象者の90人の初潮年齢の平均は14.6歳と、日本に比べて遅めの印象であった。それまでに家族あるいは学校のいずれからも月経について習っていないということになる。教科書を見るとウガンダの学校では小学5・6年、中学4年で月経について教えることになっている。小学校5年生に教えるのであればそれほど遅くない、と日本人なら思うかもしれないが、ウガンダ農村部では小学校入学年齢にバラつきがあり、加えてウガンダでは小学校でも留年や休学する生徒が多いため、小学校高学年で10代後半ということも決して珍しくないのである。

では、月経について最初に学ぶのは誰からなのであろうか。図1に示すように8割以上が母親からであった。ギス社会では、父方のオバが性教育を与える役割を担うので、父方のオバが月経についても教えるのかと筆者は仮定したが、実際には、母親が病死や離婚などで身近にいない場合に、オバや姉が教える、というものであった。

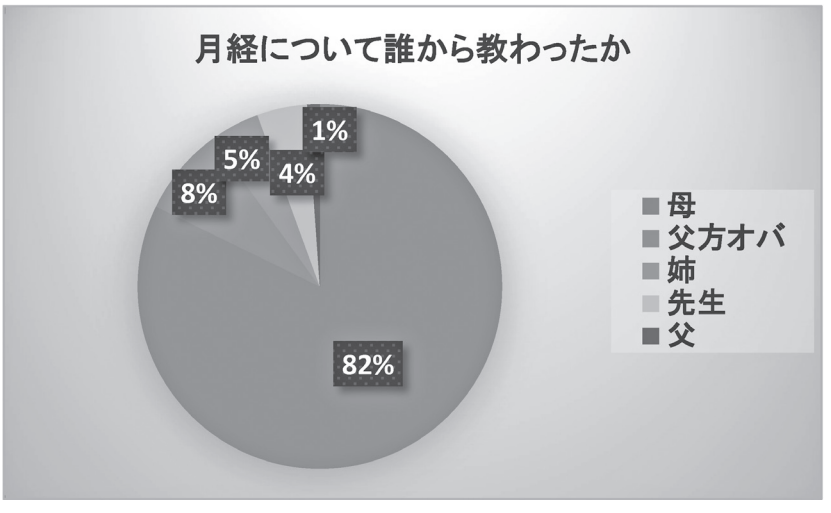

図1.　月経について誰が教わったか　（n=90）［出典：筆者作成］

また、小学校や中学校では生物の授業の一環で習うことになっているが、学校の教科書は、生物・生殖としての内容になっており、実生活に必ずしも結びついていない。また、男子と一緒に男性教員から月経について学ぶことの心地悪さを感じている生徒も多く、男女別の教育の必要性を生徒たち力強く訴えていた。月経について、いわゆる生理不順や頭痛・月経痛への対処、経血の吸収体となる製品（ナプキンなど）のことについて女子生徒は知識を欲しており、学校などでもっとそうしたことを教えて欲しいという要望も聞かれた。

9. 月経用品とその処理

さて、月経用品（つまり経血を吸収されるためにの布や紙など）はどのようなものが使われているのであろうか。伝統的には*Ifungo*という写真（図2参照）のようなものを膣に詰めてタンポンのように使っていたそうだ。これはバナナ（マトケ）の木の茎（図3参照）の繊維が枯れたものを揉んで、その場で作る。私は、インフォーマントの女性から作り方を教わったが、現在も使っている人は少ないようで、女子中学生はその存在すら知らない人が大多数であった。

図2. 伝統的な経血の吸収体［出典：筆者撮影］

図3. マトケの茎［出典：筆者撮影］

調査対象の中学生が何を使っているかという、質問票の結果を図4に示す。ここで気を付けなければならないのは、95.5%の女子生徒が「紙ナプキンを使用している」という点だん。おそらく、「紙ナプキンの方が、より現代的でカッコいい」という意識があり、実態以上に数値が高くなっている可能性がある。また、質問票では複数回答制としたため、紙ナプキンを利用すると回答した人も、月経期間中ずっと紙ナプキンのみを使うのではなく、経血量の多い日、学校に行っている間だけ、紙ナプキンを使う人が多いと思われる。このように筆者が推定する根拠は、この地域で紙ナプキンを販売する唯一の雑貨屋の店主に紙ナプキンの売り上げを聞き取ったところ、ブゴベロ・ハイスクールの女子生徒の95%にナプキンを供給しているとは考えにくいことにある。この地域では、水曜日に定期市も立つが、紙ナプキンを取り扱う商人はほんの数人である。また金額的にも紙ナプキン数個入りが1パック2000シリングから3000シリング（2015年時点でおよそ56円から83円）で、滅多に飲まないソーダが1000シリングであることを考えると、現地の女性学生にとって安いとは言えない価格である。月経用品として、古布も半数以上（51.8%）が利用していると回答していた。古布は、着古

したTシャツなどを四角く裁断して、使用時に折りたたんでパンツにおいて使う。一方、布ナプキン（46.6%が利用と回答）は、あらかじめ布を縫っているものである。

驚いたことに、パンツのみやトイレットペーパーと回答した学生もいた。経血が減った4日目、5日目あたりの対処法であろうか。さらに、綿の実とは、畑で栽培中の綿の木から採って使うというものである。通学途中や学校の近くの人の畑から、黙って取ってくることもあるようで「やむを得ずもらってくる」と言う学生も少なからずいた。

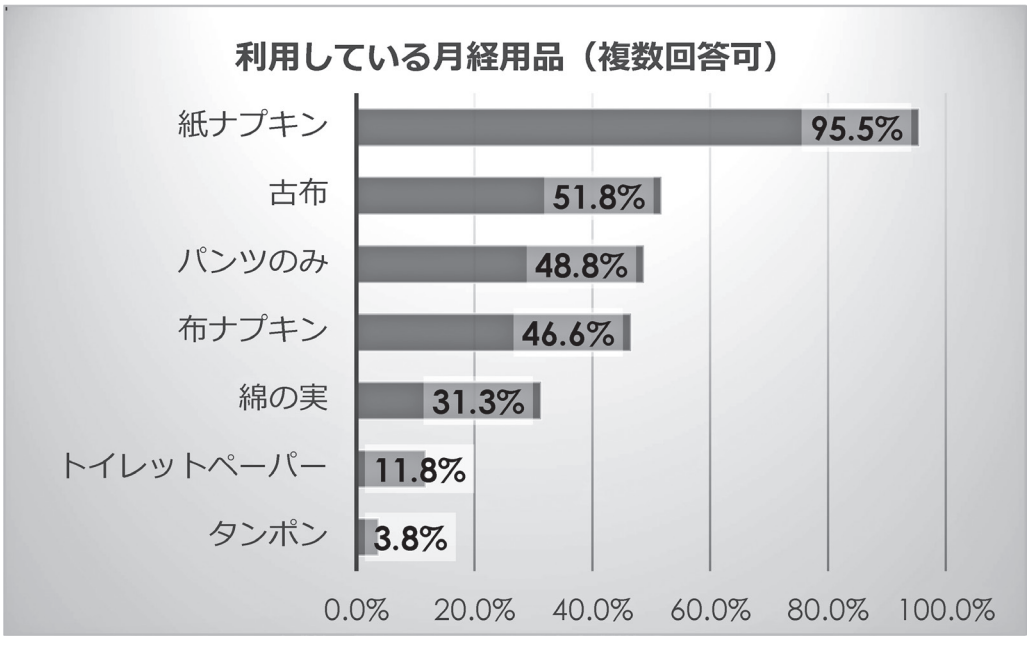

図4. 月経対処に使っている吸収体［出典：筆者撮影］

こうした月経用品は、交換したあと、どのように廃棄されているのだろうか。紙ナプキン、古布、綿、トイレットペーパーについては、ほぼ全員がピット・ラトリン（落とし込み式便所）の穴の中へと回答している（98%）。　これは、邪術に利用されることの怖れからである。代表的な声として、

「たとえゴミ箱がトイレ内に置かれても、ナプキンは絶対捨てられない。陰から見張っていた継母が、自分が立ち去った後に拾って、ウィッチドクターのところへ持って行くかも。」

というものがあった。一夫多妻制であるギスの社会では特に継母との間に緊張関係があり、女子生徒たちは継母による邪術を恐れているようであった。

古布、布ナプキン、下着（パンツ）を再利用する場合は、全員が洗濯の際に石鹸を使って洗濯すると言っており、干す場所は、人目につかないところで行うと言う。多くの女子は、室内に（タライの淵にかけてベッドの下に隠して）干すが、戸外の場合は、自宅の外に一般

的に設置されている沐浴場の囲いのところに掛け、上から薄い布をかけると説明する。こうすることで、人目に触れたり布ナプキンなどを持ち去られることはないのである。こうした細心の行動も、洗濯した古布などが邪術に利用さ得ることへの怖れが一つの大きな要因となっている。

10. 問題提起と提言

考察・問題提起に入りたい。国際社会で「月経」がアジェンダとなり、女性、とくに思春期の多くの女子が困難を抱えながらも声に出せない月経の問題に対処しようという動きそのものは、筆者は歓迎すべき方向性だと考える。しかし、ウガンダの事例をもとに考えると、月経をめぐる女子生徒の経験や声に配慮した対応・介入が必要であることが浮かび上がってくる。本稿では、ウガンダの女子生徒の月経についてのタブー観や知識を得る機会、月経用品の処理法などについての調査結果に基づいて、月経の知識と月経用品に絞って問題提起をしたい。

まず、月経についての知識の普及が不十分であることは、初潮時に48％の女子生徒しか月経について知らなかったことからも明らかであろう。ウガンダの初等・中等教育における留年の実態を考えると、現行の小学5・6年生で教えるのでは遅いのであろう。男女別で月経について教わりたいという声も強く、小学校のもっと早い段階で女性徒だけを対象に、月経教育を実施することが必要なのではないだろうか。また、内容も現在の理科の教科書に載っているような生殖機能としての排卵や月経のことではなく、女子生徒たちの悩みに寄り添った経血の処理法や生理痛、月経不順のことなどについての知識を提供するものが良いのであろう。

また、MHMの推進と、月経用の使い捨て紙ナプキンを販売する企業のマーケティングが相まって、紙ナプキンの普及が確実に進んでいると言える。本研究の対象村では常時紙ナプキンを販売する店舗は1店だけであったが、2011年に筆者が同村で調査を実施した時にはまだ販売されていなかった。この紙ナプキンは、邪術に利用されることへの恐れから、女性は皆、使用後はピットラトリンに廃棄する。自然に土にかえらない紙ナプキンが廃棄されつづけると、確かに環境やピットラトリンの寿命の観点から問題があるだろう。ただ、簡単にゴミ箱や焼却炉をつくればよいものではなく、女子生徒の視点に立った廃棄方法・設備を整える必要があり、それなくして紙ナプキンの普及が妥当か疑問視される。

また、布ナプキンについても注意が必要であろう。私の調査地の女性は　古布の利用経験があるので小まめに洗濯する習慣はあるものの、布ナプキンはより厚手なので乾燥しにくい。布ナプキンを普及する団体は、製品を石鹸で洗濯後に天日に干すことを推奨しているが、乾燥の方法の現地での実態をふまえないと、厚手の乾きにくい布は菌の培地となりかねないのでは、と懸念される。

今後MHMへの支援が拡大することが予想されるが、その支援にあたって、本稿でみてきたような実態や女子生徒の声が反映され、各地域にあわせたMHMの取り組みが広がることを望みたい。

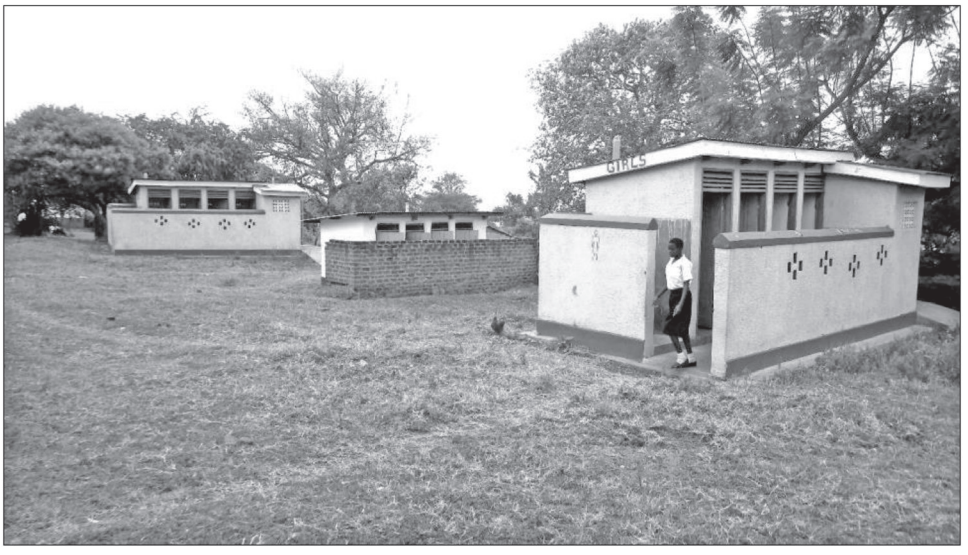

図5. 調査対象校のトイレ［出典：筆者撮影］

【参考文献】

ウォーターエイドジャパン（2015）5月28日は月経衛生の日です　http://www.wateraid.org/jp/news/news/menstrualhygieneday（アクセス 2015/5/28）

新本万里子（2013）「月経小屋の消滅と高床式家屋の出現―パプアニューギニア・アベラム社会の性と家族」、小池誠（編）、『生をつなぐ家』221-241頁、風響社

大辞林（2016）「月経」『大辞林』第3版、三省堂

武谷雄二（2012）『月経のはなし：歴史、行動、メカニズム』中公新書

田中ひかる（2013）『生理用品の社会史：タブーから一大ビジネスへ』ミネルヴァ書房

波平恵美子（2009）『ケガレ』講談社学術文庫

松尾瑞穂（2007）「女性の身体：身体は所与のものか」池田光穂・奥野克己（編）『医療人類学のレッスン：病をめぐる文化を探る』学陽書房

Afripad（2015）Menstrual Kits. http://afripads.com/blog/our-products/（アクセス2015/1/9）

BRAC（2015）Yes, hygiene and school enrolment are directly proportional　http://blog.brac.net/2015/01/yes-hygiene-and-school-enrolment-are-directly-proportional/#sthash.Jyly14U2.dpuf（アクセス 2015/3/9）

Ministry of Education and Sports, Government of Uganda（2013）Understanding and Managing Menstruation.

Ministry of Education and Sports, Government of Uganda（2015）Press Release, Menstrual Hygiene Day, 2015. *www.education.go.ug/files/downloads/Press Release*
（アクセス 2015/5/28）

New Uganda（2014）Bagisu People: Uganda’s most fearsome patriarchal tribe and their Culturally unique Circumcision Ceremony
http://www.newuganda.com/bagisu-bamasaba-people-ugandas-most-fearsome-patriachal-tribe-and-their-culturally-unique-imbalu-circumcission-ceremony/（アクセス 2016/7/28）

Snel, Marielle（2015）Vision and leadership taking place around menstrual hygiene management in Uganda
http://www.ircwash.org/blog/vision-and-leadership-taking-place-around-menstrual-hygiene-management-uganda （アクセス 2016/7/28）

United Nations（2016）Sustainable Development Goal 6
https://sustainabledevelopment.un.org/sdg6 （アクセス 2016/7/28）

Wash United（2014）28th May Menstrual Hygiene Day, http://menstrualhygieneday.org/（アクセス2014/9/5）

WHO & UNICEF（2014）WASH POST-2015: proposed targets and indicators for drinking-water, sanitation and hygiene.
http://www.unicef.org/wash/files/4_WSSCC_JMP_Fact_Sheets_4_UK_LoRes.pdf
（アクセス2015/3/20）

How is menstruation perceived and experienced? : Reconsidering Menstrual Hygiene Management as an Agenda in International Development from a case study in Uganda

SUGITA, Elli

【Summary】

In the past few years, women's menstrual hygiene has caught attention as an international agenda. In Goal 6 (water and sanitation goal) of the Sustainable Development Goals (SDGs), it is indicated to pay "special attention to the needs of women and girls" to achieve access to adequate and equitable sanitation and hygiene for all. This implies support for the management of menstrual hygiene. The acronym MHM for Menstrual Hygiene Management has become widely-known among development practitioners.

However, menstruation is a domain not often talked about in local societies. Culture and taboos related to menstruation vary among different societies. These aspects, this article holds, should be considered before a wide-scale intervention is undertaken by international development agencies.

This article describes how high school girls in rural Uganda perceive and experience their menstruation. The study is based on questionnaires (n=90) and focus group discussions (n= 23) with high school students and interviews with women with children in the village (n=41). It shows that 48% of the girls did not know about menstruation until their menarche and they do not have enough opportunity to learn practical knowledge of menstrual management. There are a number of taboos for women during their menstruation, including the disposal of and drying of their absorbent. This article concludes with some suggestions based on the case study.

【Key words】 menstruation, culture, taboo, Menstrual Hygiene Management (MHM), Uganda